

日吉台地下壕保存の会

会報

第29号

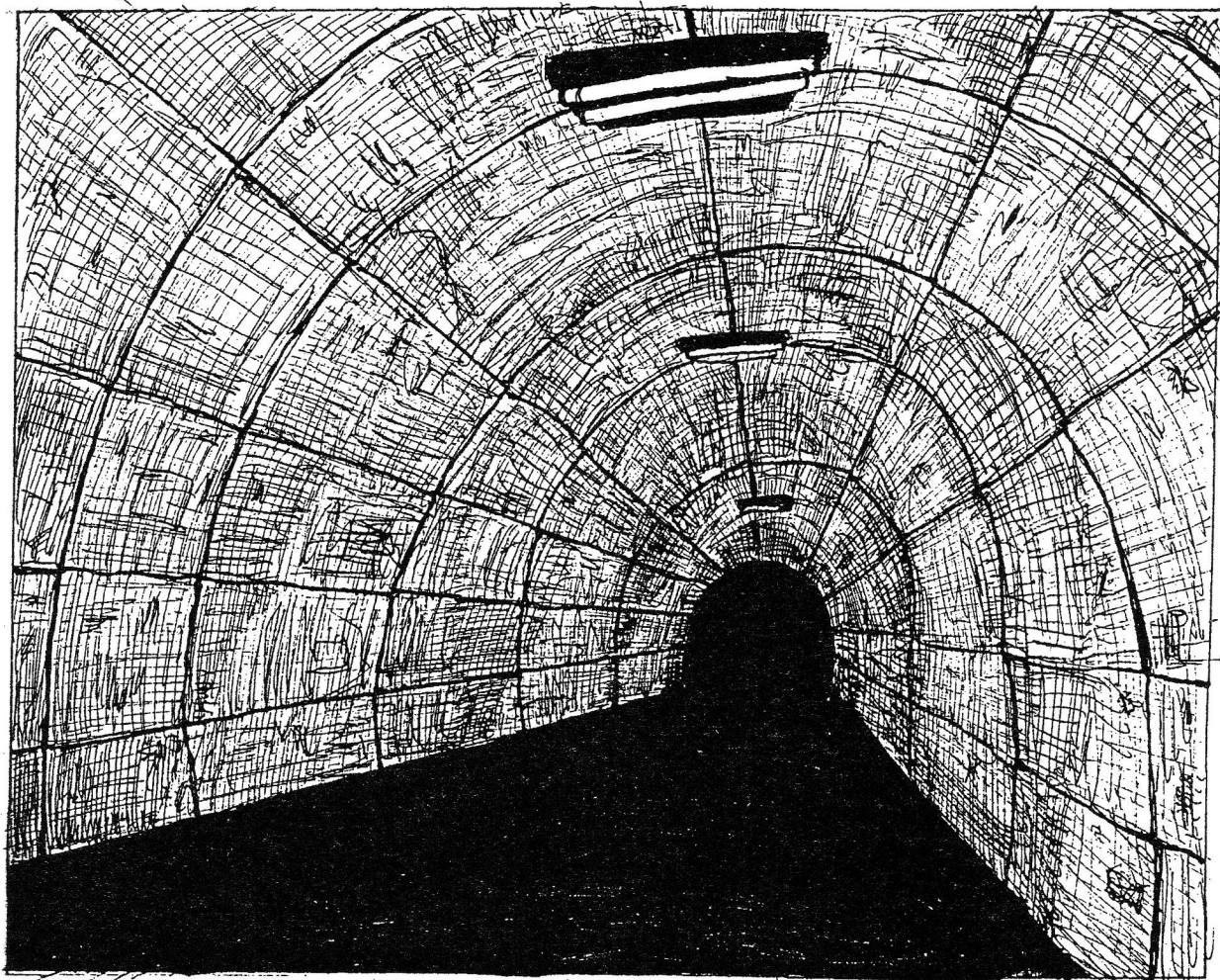
発行 日吉台地下壕保存の会
編集 事務局

223 横浜市港北区下田町3-15-27

寺田方 TEL.045-562-1282

(年会費)一口千円で、一口以上
郵便振込(口座番号)横浜 5-74921

(加入者名)日吉台地下壕保存の会



目次	ページ
「特攻」と「原子爆弾」	2～3
日吉台地下壕見学会感想文	4～5
連載日吉台地下壕	
当時の関係者の思い出話	6
旧陸軍登戸研究所のニュース	7
幹事会報告	8

日吉台地下壕内部 岡上そう画

「特攻」と「原子爆弾」

その責任を問う

幹事 谷 栄

あの戦争をめぐる半世紀の時間が過ぎていく――。

昨年一九九三年はこの日吉の学舎から学生の姿が消え失せた「学徒出陣」の日から五〇年目であつたし、翌一九九四年の今年は「学童疎開」

(小学生)、「勤労動員」

(中学生)と幼年世代が一斉に戦時体制に組みこまれ、

また連合艦隊司令部と変つたこの日吉の地からの出撃命令で、はじめて特攻作戦が開始された年から五〇年目に当る。

特攻作戦は日本軍の戦争末期における最後の攻撃戦法であり、一方アメリカはその半年後に投下する原子爆弾が最終のものとなる。たった一発

の爆弾が万余を越える人命を無差別に奪うものであれば、

たった一発の爆弾を抱き一〇〇%自死が保障される攻撃とは、ともに史上はじめて行われた戦法であり人間の存在を無に導く戦争の本質を余すところなく表わすものであつた。

特攻作戦はやがて空からのみでなく「人間魚雷」として海中からも行われる。敗戦数ヶ月前から私は帝都防衛の地上部隊の一兵士として九十九里浜近くに駐屯していた。上陸時撃退の戦術としてサイダー

瓶にガソリンをつめ、それを抱いて敵の戦車に肉薄、体当たり攻撃を行うという訓練をうけていた。空・海・陸と正に全軍あげての総特攻化作戦

が計画され実行されていたのである。

戦争は人を殺しあうことによつて成立し、それが目的化される。その果てにアメリカは原子爆弾に、日本は特攻攻撃へとたどりつく。人間をモルモットとして位置づけ、人間を爆弾と同位置に設定しての攻撃方法は他にその例をみることがない。

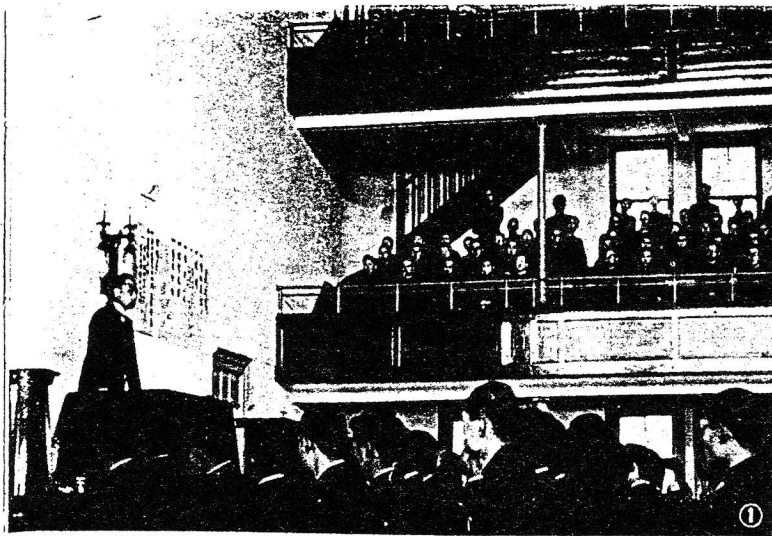
この日吉の司令部からの特攻命令は間断なくつづき、一九四五年三月沖繩に米軍上陸以来は連日のように発令された。日吉の学舎で学び「学徒出陣」をした上原良司は出撃の前夜こう書き遺している。

「……空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人がいったことは確かです。操縦桿を操る器械、人格もなく感情もなくもちろん理性も

なく、ただ敵の航空母艦に向つて吸いつく磁石の中の鉄の分子に過ぎぬのです。理性をもつて考えたら実に考えられぬ事で強いて考うれば、彼らのいうごとく自殺者としてもいいでしょうか。精神の国、日本においてのみ見られる事だと思ひます。……」

翌一九四五年五月一日、特攻隊員として沖繩嘉手納湾の米国機動部隊に突入自爆死する。享年二二才。敗戦より僅か三カ月前のことである。

戦後アメリカ国内では無謀な作戦により不要な戦死を遂げた兵士の遺族達がその指揮官を告訴するという例が数々あつたことを私は最近知つたのだが、とすれば日本の場合はどうなのだろう……。一〇〇%の必死行為を命じた者の責はその何層倍のものな



学徒出陣における塾長訓示
図説慶応義塾百年小史
1858～1958より

のか、はかりしれない。

日吉の安全地帯から特攻作戦を指令した長官豊田副武も、陸海軍の統帥権をもつ大元帥昭和天皇も、戦後占領軍による戦犯指定を免れたし、また日本民衆からの告発をうける

こともなかった。——それから五〇年、かつて日本軍によって侵略されたアジア各地各国の民衆から日本の戦争責任と戦後補償を求める運動がつぎつぎと起っている。

”従軍慰安婦” ロームシャ”

”旧日本軍兵士”と様々の様相の中にこの国の犯した加害の酷さを改めて知る。と同時に自らの立場で自らの国の責を問わなければならない。この追求がアジアの民衆に込められた戦争を共有する一つの途になるのではないかと私は考える。

戦争の重さは時とともに決して軽くなり失せていくものではない。逆にその加重度は年とともに増しつづける。それは加害者と被害者という相反する面が重なり交りあい、わりきれないきしみをともなう。国の責任を問うという中に自分自身の責もまた含まれることを認めつつ、私は日本の特攻攻撃と米国の原子爆弾投下とを告発したい。

「……私の理想は空しく敗れました。人間にとって一

国の興亡は実に重大な事でありますが、宇宙全体から考えた時は実に些細な事です。……」

上原良司はこうも書き遺している。

その無念さを忘れてはならない。

その理想を甦らせなければならぬ。

生あらば今年七十一才、私と同じ年齢である。

~~~~~ 特攻50周年 戦時下の青春展

期間：8月9日～9月20日

場所：慶応義塾大学三田
新図書館1階右奥

下車駅：JR田町駅
地下鉄三田駅
バスもあり

~~~~~

# 日土ロム口地下壕 見学子△△感心△△

一九九四年五月一七日

慶大白井ゼミ

★空気がとてもひんやりして  
いて、それが妙に当時の状況  
を感じさせる。

朝鮮人の人々が厳しい条件で  
働かされたことを思い複雑な  
気持になった。

★地下壕は予想したより広く  
長く、いかに沢山の人が動員  
されたか、また、使用したの  
は昭和一九年九月〜二〇年八  
月で、当時の日本の軍の中樞  
であったということが、その  
地下壕の大きさを見て、わか  
った。あれほど大きな地下壕  
が必要なのは太平洋戦争は大  
規模で多くの物質を必要とし  
た。戦争を知る上で非常に貴  
重な体験だった。

★寒かった。戦争当時の遺物

を実際に初めて見学したので、  
自分には縁がないように思っ  
ていた戦争を、身近に生々し  
く感じる事ができた。

★素掘りでここまで広大なも  
のを作ったのはすごい。ただ  
その時酷使された朝鮮人の方  
を考えると、とてもひどいこ  
とを日本人はしたんだなと痛  
感する。知らずのうちに穴掘  
りで死んでいった彼らに何ら  
かの形で謝罪すべきだと思っ  
た。

★予想以上に規模が大きく、  
又、しっかりしたつくりであ  
った事に大変驚いた。当時、  
あちらこちらで人々が動き回  
り、大変大きな働きを成して  
いたことが信じ難くも思えた。  
当時の様子を明確にするよう  
な写真などがあれば、照し合  
せて見たいと強く感じる。活  
気のあった地下壕が今のよう  
に暗く静まりかえっている様

子に、歴史の流れ、経過を感  
じずにはいられない。

★単なる地下壕にすぎず、自  
然の一部と一体化している感  
じがした。

★泥水が予想以上に深く、レ  
インシュアズに入りそうだっ  
たので、残念ながら途中で引  
き返した。写真や文章で書か  
れた記録と違って、生々しく  
戦争中の状況が伝わり有意義  
だった。

★次回こそ長靴を田舎よりと  
りよせてから来たい。卒業さ  
れた先輩方から聞いていたの  
で、もっと立派なのを期待し  
ていた。照明の跡、水道の跡  
以外は当時使用された跡がな  
いのが少し残念だった。

★何も無いところだった。  
これだけの規模のものが、ど  
うしてあまり知られずにいた  
のか不思議。

★さまざまな命令が出されて

いたと思うと「歴史」を感じ  
ることができました。

★戦争の遺跡がそのままの形  
で残っているのが驚いた。戦  
艦大和の出航命令が出たなど  
と聞くと非常に感慨深い。鍾  
乳石ができていたのを見て、  
戦争が終って長い時間が経っ  
たことを改めて感じた。

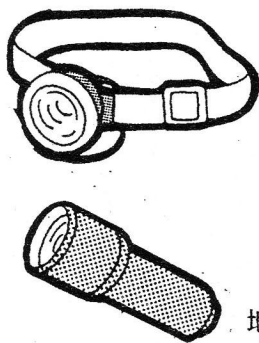
★思っていたよりも大規模な  
ものだった。戦争というもの  
をより身近に感じる事ができ  
た。地面のぬかるみをのぞ  
けば保存状態もよく、五〇年  
というのは長いようで短いと  
感じた。

★自分達の世代では戦争に関  
する事物に接する機会がない  
ので大変に興味深い体験だっ  
た。

★軍隊がつくった地下壕とい  
うだけあって、高さや幅が機  
械でつくったように整ってい  
るのに感心した。

★戦時中の姿からは少し変化していたが、取り壊されることなく残されていることは有意義である。戦争を身近に感じる所が年々減り続けているだけに、戦争について語りかけるような形にして後世に残して欲しい。長靴で良かった。★昭和一九年三月になって、大規模な地下施設を海軍が真剣に設けたことに少々、面食らった。敗戦必至の状況で、あそこまで本格的な施設を作るあたり、当時の軍人の無謀さを感じざるをえなかった。★戦争に関する情報を得たというより、半世紀の間、放置されていた廃跡としてのすさまじさに強い印象を持つ。★まず、最初に失敗がありました。長靴持参といわれたにもかかわらず甘くみて持ってこなかったことです。しかし、段奥へすすんでいくにつれ、段々

々と気持が高ぶってしまい、そんなことは関係なくなってしまう。それだけ地下壕にはひきつけられる歴史の重みを感じました。★戦争当時の様子を想像させていただきました。保存だけでなく、もっと活用していたきたい。★あれだけのものを掘るには大変なことだったろうと思うし、それにたずさわったのが、朝鮮人と聞き、そこにも、朝鮮とのからみがあることを知りました。あんな穴の中で我々人間が国を守る為とはいえず、会議その他をやっていたことを想像するとやはり戦争は狂気と思わざるをえません。★旧軍の施設を見るのは初めてです。子供の頃に見聞した軍人、また空襲のことなどあらためて思い出して胸にドシンと来る思いです。



地下壕見学の必需品

★五〇年経た今でも比較的良い状態で残っているのに驚きました。戦争の事実を忘れてしまわないように当時の状態を再現したミュージアムにできるとよいですね。★二回目ですが、感慨新た。あの中で指揮していた人、働いた人はどんな気持だったろうか。歴史を大事にしなければいけない。

保存についてのご意見は？

★戦争遺物をマイナスの遺物と考えずに、二度とあのような悲惨な戦争を起こさないために、もっと一般に開放して一人でも多くの人に見学してもらいたい。このまま手を加えずに生々しいままで保存してほしい。★保存と同時に、一般の人々が見学できるように、修復や説明を行なっていただきたい。★是非保存してほしい。その理解の補助として資料館をつくると見学者も増えるのではないか。★地下壕が歴史的遺跡になったら、朝鮮人労働者のための記念碑をたててはどうか。★保存を敗戦五〇年を期に実現しましょう。



連載

# 日土ロムロ地下壕 当時の関係者の 思い出出話 6

## 地下壕の築城 1

元海軍第三〇一〇設営隊主計長・御厨氏に地下壕建設について伺います。

御厨 文雄氏の話

(ききて・寺田貞治)

昭和一九年八月、海軍第三〇一〇設営隊が結成され、日吉の連合艦隊司令部の地下施設建設を皮切りに、海軍省・軍令部などの地下施設の建設を終戦の日まで続けた。このような建設の仕事を海軍では築城と呼んでいた。

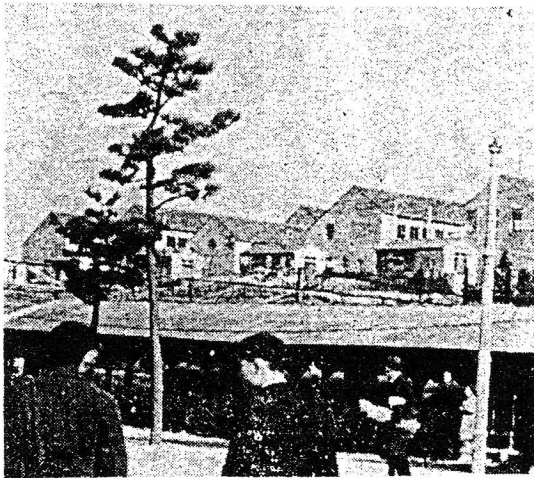
第三〇一〇部隊は、大工・左官など徴用の兵からなり、一二〇〇人がいた。最初の仕事は慶大寄宿舎の改造であっ

た。

しばらくして民間の鉄道工業(株)から二〇〇〇人が派遣されてきて、昼夜三交代で地下壕を掘りはじめた。鉄道工業(社長菅原通斉、戦後解散した)は鉄道工事専門企業で、特にトンネルを掘るのが専門であった。

二〇〇〇人の派遣員のうち、少なくとも七〇〇人位が朝鮮人労働者であった。朝鮮人労働者には難工事をやらせ、待遇もひどかったようだ。現場に行くと面倒なことが起こる恐れがあるので、近づかないようにしていた。

地下築城はかなりの重労働だったため、時々酒など気付けのため調達して出したりした。酒は豊富にあり下士官までもよく届けた。タバコ(黄金バット)は一日八本配給があった。



慶大日吉キャンパス内の地下施設が完成したのは、二〇年五月中旬であった。

設営隊の上層部は文官が多く、後で士官になった。

私は主計中尉で正確には主計長職務執行という肩書で、給与、被服、食糧等の調達のほかに、施設設営用の原料、資材の購入調達などの仕事をしていた。

はじめ現高校校舎にいたが、

海軍省人事局が書類を持って引越してきたので、藤原工大(現第四校舎辺り)の木造校舎に移った。空襲の時には高校校舎近くの地下壕に避難した。藤原工大の校舎が空襲で焼けてからは、バラックを建てて仕事をした。

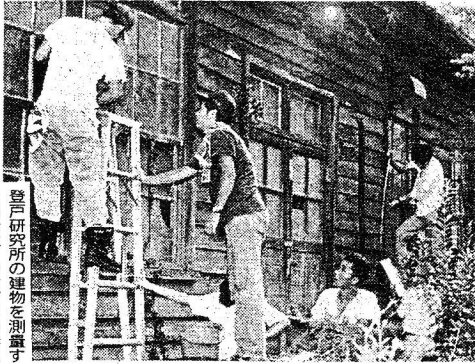
昭和二〇年七月二五日、柔剣道場の仕切を取払って演芸大会をやった。田中絹代、淡谷のり子など松竹の演芸部の人達がきた。終了後、管理責任者の牧先生から仕切の壁を取払ったことで文句をいわれた。

(生協ニュース教職員版第五号より抜粋転載)

日吉駅より藤原工大  
学部校舎を見る  
慶応義塾大学工学部  
三五年史より

(7)

# 陸軍研究所 全容解明へ本格調査



陸軍研究所の建物を測量する明治大・中村ゼミの学生たち

「平和のための戦争展」開催時に協力しあっている、法政二高・渡辺賢二先生が調査しておられる旧陸軍登戸研究所のニュースをお届けします。

## 明大教員ら 敷地の戦時「検証」 軍事作戦、思想的背景も

第二次世界大戦中、日本本土に作られた最大の謀略研究機関で現在の明治大学生田キャンパス（川崎市多摩区東三田）にあった「陸軍登戸研究所」の全容を解明しようと、おひざ元の明治大学の人文科学研究所と理工学部建築学科の教員らによる研究活動が今年の夏からそれぞれ本格的に動き始めた。同研究所は風船爆弾や二七札、毒ガスなどの研究をしたほか、中国での人体実験などで有名な七三一部隊とかかわっていた可能性もあるといわれる。現存する研究所施設の取り壊しが取りざたされる中、市民らが進めている保存運動にも影響を与えそうだ。

建築学科の中村幸安助手のゼミでは、今月一日から、現存する第二十六号研究棟（木造平屋建て）の調査を始めた。建物の測量やくぎ、かわらなどの材質を調べて建築年代や建築にかかわった業者などを特定。また建物の木材や敷地内の土中などにしみ込んだ薬品や血液などを化学的に分析し、戦時中の研究内容を推測する。

調査は今後数年間続けていくが、手始めに七日までに、建物を測量、設計図を複製する予定。同ゼミの学生ら約十人は、連日の猛暑の中、メジャー片手に各部の寸法を測っている。

中村助手は「現在も、国内の大学で、軍事兵器に関連した研究を行うところがあり、学問が戦争に悪用されないようにするためにも詳しい調査が必要と考え

た。研究棟が保存できれば、保存法の参考資料としても提供していきたい」と話している。

同研究棟は、戦後、明大の実験室として引き継がれたが、大学側が教室不足などから取り壊しを検討。市民らはそれに反発し、署名などの保存運動を行っている。

文学部の海野福寿教授ら七人のグループは先月、明大人文科学研究所の総合研究として登戸研究所を取り上げることを決め、計六百万円の予算が大学側から認められた。来年度から三年間、登戸研究所を通じての旧日本軍の軍事作戦や登戸研究所を生み出した思想的背景などを研究する。

研究では、メンバーが各専門分野ごとに、二七札づくりが中国経済に与えた影響、同研究所と朝鮮半島支

配との関連、軍の中での位置付けなどを調査。また七三一部隊の生体実験と同研究所で行われていた生物・化学兵器研究との関連についても調べる。

グループには森恒夫経営学部教授、飯田年穂政経学部教授らのほか、学外から独自に登戸研究所の調査をしてきた法政二高の渡辺賢二教諭も加わる。

森教授は「明治大で働いているものが、学校の敷地で戦時中に行われたことを検証するのは義務と考えた」と研究グループ結成の理由を語っている。今月中旬、具体的な研究方法などを話し合う予定だ。

毎日新聞

一九九四・

八・五より

# 幹事会△△報告生口第二回

六月九日午後六時

慶応高校地学教室

## 報告

- 一、五月一二日慶応高三年M組地下壕見学会四三名参加
- 二、同一七日慶大井ゼミ地下壕見学会三五名参加
- 三、六月六日神奈川生協港北支部平和委員会地下壕見学会二八名参加
- 四、同二二日NTT関係者地下壕見学会予定
- 五、七月二四日国立市公民館地下壕見学会予定
- 六、小園幹事より①「地下壕のパンフ」の横浜空襲の日が五月二四日になっているが二九日がよくはないか。
- ②東京や三浦の会合で平和館の問題や戦後補償の問題など意見交換しているなかで、勉強会を持つなら協力する旨、了解を得ているが、

企画してはどうか。

③第五回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流会が長野市であるので、松代の大本営跡の見学会を再度企画してはどうか。など電話があった事が報告された。

## 議事

一、第五回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流会（長野市・七月三〇～三一日）の参加について

\*足立幹事に打診、都合がつかなければ本年は不参加

二、白井ゼミより、特攻五〇年の展示に連合艦隊司令部の地下壕写真パネルの貸し出し依頼あり

展示期間、場所

八月九日～九月二〇日  
慶大三田新図書館一階

一時移動展示

八月一八日～二二日

銀座マリオン一階

この間「月光の夏」上映

\*貸出すことに決定

三、ピースサイクルとの交流会について

七月一九日地下壕見学会のあと、六時より藤山記念中会議室

会議室

\*幹事に出席を呼びかける

四、今後の活動計画

学習会・戦争体験者の話、

地下壕生活体験者の話を聞くなど

など

\*会員の希望を聞く

五、会報二九号について

\*八月二〇日過ぎに発行

幹事会△△報告生口第三回

七月九日一八時

日吉地区センター

## 報告

一、六月二二日NTT関係者

地下壕見学会二七名参加

二、七月一〇日朝鮮人強制連

行真相調査団（三浦半島地

区教職員・朝鮮人学校の先

生と生徒等）地下壕見学会

・交流会予定

三、同一九日ピースサイクル

地下壕見学会・交流会予定

四、八月一二日南風原文化セ

ンター（職員・教員・元従

軍看護婦等）地下壕見学会

・交流会予定

五、同二二日聴覚障害者団体

の地下壕見学会予定

## 議事

一、白井ゼミの特攻五〇年の

展示に貸出す資料の搬送に

ついて

\*幹事で車の手配が出来ない

ときに手伝ってもらえる会

員を探す

二、地下壕見学会について

\*説明や地下壕の案内ができ

る人を増やす



# 三浦半島地区の地下壕見学会

主 催：日吉台地下壕保存の会

集合日時：10月9日（日）午後1時

集合場所：京浜急行 追浜駅改札口（東側）

見学場所：横須賀市浦郷町元横須賀海軍工廠地下工場跡など

この地下壕は長さ延べ13kmあり、日本最大と言われる。ここは人間魚雷「桜花」やロケット「秀水」を製造していた。ここでも多くの朝鮮人が地下壕掘削に従事していたと言われる。

案 内 者：神奈川県朝鮮人強制連行真相調査団・三浦半島地区教職員組合の方々

携 行 品：懐中電灯、長靴

費 用：参加費＝500円（当日徴収します）

交通費＝追浜までの往復乗車券（各自負担願います）

